

# 琉球八重山地方の指示詞について

荻野 千砂子

## Demonstratives in the Yaeyama dialect

Chisako Ogino

(2008年11月28日受理)

### 0 はじめに

琉球方言の指示詞に興味を持ったのは、沖縄県石垣市出身の学生の卒業論文指導をしたときである。卒業論文のテーマに関して相談していたとき、学生が「国語のテストで『それ』や『そう』が何を指すかという問題がわからなくて嫌いだった」と言った。そこで、学生の発話を注意しながら聞いていると、学生は「これ、ここ」等のコ系指示詞、「あれ、あそこ」等のア系指示詞は使用するが、「それ、そこ」等のソ系指示詞をほとんど使用せず、ソ系指示詞を使用すべきと思われる箇所にはほぼア系指示詞を代用していた。

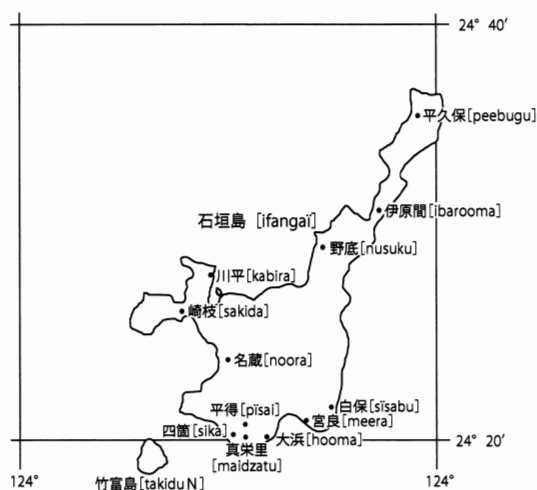
これは、八重山地方の指示詞が共通語のコソア指示詞の使用法と異なっているために、若い世代でも共通語指示詞の使用にずれが生じているのではないかと考えた。そこで、石垣市での調査を2006年から少しずつ始めた。「これ、それ、あれ」にあたる語彙として石垣方言では *kuri*, *uri*, *kari* (<*ari*>) の3語があり、共通語と同じ三語の体系である。しかし、調査を始めてすぐに *kuri*, *uri*, *kari* の区別を説明することは難解な問題であると実感した。なぜなら話者の多くは「*kuri* と *uri* とはだいたい同じ」という認識を持っていたからである。本稿では、琉球八重山地方の石垣地区・宮良地区・川平地区における指示詞に関して現在までに明らかになったことを述べる。

### 1 調査地点の説明

石垣島は、那覇から411kmにある八重山群島の中に位置し、八重山地方の中心的な市である。市役所所在地は北緯24度2分、東経124度2分の位置にある。面積は平成18年10月1日時点で229平方キロメートル、人口は45,183人である<sup>\*1</sup>。石垣島の南側に市街地があり、四箇しつかと呼ばれる。四箇字は石垣あらがわ、新川しんがわ、大川おほがわ、登野城のぼりしろの四集落からなる。

今回の調査は四箇字の石垣地区と、宮良地区(1771年の明和の大津波で八重山の住人が多数流された。壊滅的打撃を受けた地方は移住者を迎えた。宮良地区は小浜島からの移住者かびらを迎えて再建された地区である)と、石垣島北部の川平地区の話者に協力を依頼して行ったものである。同じ石垣であるが、それぞれの地区で音声や語彙の相違があり、地区ごとの調査が必要である。

宮良信詳(1995)『南琉球・八重山石垣方言の文法』より地図抜粋



用例は音声表記とし IPA (国際音声字母) を使用する。八重山地方の基本母音には, a,i,u ともう一つある。この母音は伊豆山 (2002) の観察によると, 緊張度の高い, 張唇前舌狭母音であり<sup>2</sup>, これを「*i*」で示す。カタカナ表記では, ア, イ, ウ, (ウ段音+イ) と表記をする。例えば *ki* と *ki* は, キとクイのように表記する。また, 母音の *e* や *o* は長母音のときに多く現れるが, 単独で用いられることは少ない。また琉球首里方言に代表される声門閉鎖音 [ʔ] の有無による対立は八重山地方では見られないので, 用例では声門閉鎖音は表記しないことにする。

## 2 先行研究

指示詞に関する先行研究には大きく二つある。一つは共通語の指示詞と八重山地方の指示詞が平行的であると指摘する論である。『石垣方言辞典』<sup>3</sup>の記述や宮良信詳 (1995)<sup>4</sup>では, 共通語のコ系指示詞が石垣では *ku* 系指示詞となり, ソ系指示詞が *u* 系指示詞となり, ア系指示詞が *ka* 系指示詞であると指摘する (ただし, 調査した範囲では, 石垣の市街地において *ka* 系指示詞ではなく *a* 系指示詞 <*ari, ama, anu*> の方が使用されている)。私に表にまとめると次のようになる。

	近称			中称			遠称		
共通語	これ	ここ	この	それ	そこ	その	あれ	あそこ	あの
石垣	kuri クリ	kuma クマ	kunu クヌ	uri ウリ	uma ウマ	unu ウヌ	kari カリ	kama カマ	kanu カヌ

もう一つの論は琉球方言 (八重山地方を含む) の指示詞と共通語指示詞との「ずれ」を指摘した論である。「ずれ」の状況に関しては, さらに二通りの説に分かれる。内間直仁 (1984) は沖縄本島の指示詞と, 八重山地方の指示詞の体系は異なるという見解を示す。琉球方言における指示詞を *ko* 系, *o* 系, *a* 系と類別した上で「琉球方言の代名詞においては, 二極関係構造は比較的明確な形をとってあらわれる。その二極関係構造にも二種類あって, 奄美・沖縄型と先島 (宮古・八重山) 型とがある。」と述べ, 沖縄型は <コ・ソ系> 対 <ア系>, 先島型は <コ系> 対 <ソ・ア系> という二極化の構造になっていると

する<sup>5</sup>。内間氏が先島型として調査した場所は, 石垣市川平地区と竹富町波照間島である。

伊豆山敦子 (2002) も, 基本的には二極構造であると考えているようである。しかし, 八重山地方も沖縄型と同様であるという見解を示す。八重山石垣市の宮良方言を調査し, 「指示詞としては *ku*-系と *u*-系は区別しがたいことが多い」と述べる<sup>6</sup>。

単数	<i>kuri</i>	( <i>uri</i> )	<i>kari</i>
複数	<i>kutta:</i>	( <i>uQta:</i> )	<i>kaQta:</i>
場所	<i>kuma</i>	( <i>uma</i> )	<i>kama</i>

「*kama* は話し手聞き手双方から非常に遠い所を指す。*kuma* は話し手聞き手双方に近い場所を指すと思われる。」と述べ, *u* 系指示詞については「文脈指示の可能性が高い。」とも指摘する。

以上の先行研究を総括すると, 問題点が見えてくる。いずれの論も八重山地方の *ku* 系, *u* 系指示詞が共通語のコ系指示詞, ソ系指示詞に対応することを前提として論が構築されている。ここが, 先行研究の問題点なのではないだろうか。仮に八重山地方の指示詞が独自の文法を持っているのであれば, 当然共通語との単純な比較はできなくなる。八重山地方の指示詞文法を共通語と異なる視点で分析する必要があるのではないだろうか。そこで, *ku* 系指示詞と *u* 系指示詞がどのような場合に使用されているのか, 両者の違いは何かという点について検証を行った。

## 3 石垣市の *ku* 系と *u* 系の指示詞について—眼前指示用法—

まず, 最初に眼前指示用法 (目の前に見えている物を指す用法) を調べることにした。話し手の目の前にある物や場所についての質問を行った。調査方法は, 私が共通語で下記の (a) から (d) の発話して, それを各地区の言葉では何というかを尋ねる方法をとった。(a) はものを指す代名詞「これ」, (b) は場所を示す「ここ」, (c) は体言に続く「この」, (d) は方向の「こちら」の用例である。できるだけ絵や事物を目の前で指し示し, 質問を行った。(a) から (d) は共通語ではコ系の指示詞のみを使ったが, 各地区の言葉で答えてもらったときに, *ku* 系指示詞が始めに出たときには *u* 系指示詞が使えるかどうか, また, *u* 系指示詞が始めに出た場合は *ku* 系

<sup>1</sup> 『統計いしがき』平成 19 年版第 31 号

<sup>2</sup> 伊豆山敦子 (2002) 「琉球・八重山 (石垣宮良) 方言の文法」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究 (1)』「環太平洋の言語」成果報告書 A 4-004

<sup>3</sup> 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』沖縄タイムス社

<sup>4</sup> 宮良信詳 (1995) 『南琉球・八重山石垣方言の文法』くろしお出版

指示詞が使えるかどうかを再度確かめたことにした。調査協力者の方の年代は、石垣は70歳代の方、宮良は60歳前後と70歳代の方、川平は70歳代と80歳代の方である（論文の最後にご芳名を挙げる）。

- (a) これは本です。  
 (b) ここにいてね。  
 (c) この山が於茂登岳です。  
 (d) こちらを御覧下さい。

### (1) 石垣市石垣地区

- (a) これは本です。  
kure:ja ſumutsi. クレーヤ シュムツイ / (ure ウレもよい)。  
 (b) ここにいてね。  
umanga urijo:. ウマンガ ウリヨー / (kumanga クマンガもよい)。  
 (c) この山が於茂登岳です。  
kunujamadu umutudakido:. クヌヤマドウ ウムトウダキドー / (unujama ウヌヤマもよい)。  
 (d) こちらを御覧下さい。  
umaju mijo:ri. ウマユ ミヨーリ / (kuma クマもよい)。

### (2) 石垣市宮良地区

- (a) これは本です。  
urija hon. ウリヤ ホン / (kuri クリといえないこともない)。  
 (b) ここにいてね。  
kumanga urijo:. クマンガ ウリヨー / (umangari ウマンガリでいえる。「リ」は強く指定したいときに用いる)。  
 (c) この山が於茂登岳です。  
unujamandu umutu. ウヌヤマドウ ウムトウ / (kunujama クヌヤマもよい)。  
 (d) こちらを御覧下さい。  
umaju mi:mori. ウマユ ミーモーリ / (kumaju クマユはよそ見をしている人には言える)。

### (3) 石垣市川平地区

- (a) これは本です。  
kure: hoiju:. クレー ホンユー / (ure: ウレー

でもよい)

- (b) ここにいてね。  
kumana urijo:. クマナ ウリヨー / (umana ウマナもよい)。  
 (c) この山が於茂登岳です。  
kunujamadu umutudakidi aiju:. クヌヤマドウ ウムトウダキディ アンユー / (unujama ウヌヤマもよい)。  
 (d) こちらを御覧下さい。  
kuma mi:miri:. クマ ミーミリー / (uma ウマもよい)。

(d) の方向の指示詞として共通語の「こっち、こちら」等にあたる語はなく、場所指示「-ma」を兼用していることが分かる。

さて、(1) から (3) を見ると、眼前指示の場合、共通語ではコ系指示詞を用いるところに ku 系指示詞と u 系指示詞のどちらもが使用可能であることが明らかである。とはいえ、宮良話者の用例を見ると、使用上 u 系と ku 系で何らかの相違があることが予想される。例えば (2) の (b) は、「ここ」というときに umanga を使用するためには、-ri という指定性を強める接辞をつける必要があることがわかり、u 系指示詞だけではどこか不十分さを感じているようである。(d) の「こちら」で kuma を用いるのは相手がよそ見をしているときに注目を向けたいということを考えると、u 系指示詞では指示が不十分なときに ku 系指示詞を用いているとも考えられる。

共通語では、例えば本が話し手に近い場所にある場合、話し手は聞き手に対して「これは本です」と「これ」を用いて眼前の本を指すことができる。しかし「\*それは本です (\* は非文法的であることを示す)」とは言えない。聞き手に近い場所に本がある場合には、「それは本ですね」と「それ」で指すことはできるが、自分の眼前にある本を「\*それは本です」とは言えないのである。しかし、石垣では ku 系も u 系も近称指示で用いることができることが明らかとなった。確かにこれだけを見れば、ku 系と u 系指示詞の区別が定かではないと言える。しかし、共通語のコ系が八重山地方の ku 系に、共通語のソ系が八重山地方の u 系にあたるかどうかは、まだ不明である。

\*5 内間直仁 (1984) 『琉球方言文法の研究』笠間書院

\*6 伊豆山敦子 (2002) 「琉球・八重山 (石垣宮良) 方言の文法」『消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究 (1)』『環太平洋の言語』成果報告書 A 4 - 004

\*7 田窪行則 (2008) 「日本語指示詞の意味論と統語論」『語学教育フォーラム - 16 号 -』大東文化大学語学教育研究所

#### 4 指示詞と人称との関係—眼前指示用法—

共通語の指示詞は話し手と聞き手との関係において記述されることが多い。話し手領域は「私」を中心とする一人称領域であり、聞き手領域は「あなた」を中心とする二人称領域である。その意味で共通語指示詞は人称との関係がある。先行研究をまとめたものを田窪（2008）より引用する<sup>7</sup>。

コ系列：話し手に近いものを指す

ソ系列：聞き手に近いものを指す

ア系列：話し手からも聞き手からも遠いものを指す

では八重山地方のku系は共通語のコ系に対応し、八重山地方のu系は共通語のソ系に対応するのだろうか。このことを確かめるために、宮良話者と私で、2, 3メートル離れた位置に向かい合って座り、次のような会話をし、宮良話者にどのように指示詞を使用するか尋ねた。私の周りには2, 3本のペンがある。Aさんの位置を宮良話者とする。Aさんから見ると私の領域は聞き手の領域であるから、共通語ではソ系を用いてペンを指し「それをとって」と伝えることになる。続く会話を以下のように設定した。

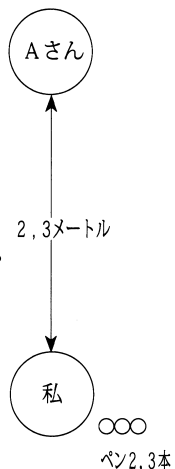
(4) Aさん：それ、とって。

(5) 私：これ？（ペンを一本手にとる）

(6) Aさん：それじゃない。あれ。

(7) 私：これ？（別のペンを一本手にとる）

(8) Aさん：そう。それ。



以上の会話の中で、kuri, uri, kariが併用できる場合があるかどうかとも質問した。

(4) Aさん：「それ、とってみて」uri turimiri. ウリトリミリー

(4)で「それ」に当たる言葉はuriであるので、聞き手領域はu系で指すように見える。ところが、重ねて質問すると、私との距離が離れているからkariでも言えるし、指をさせばkuriでも言える

という。物が聞き手から離れている場合は共通語でも「あれ、取って」となるので、kariで指せる可能性はあるかもしれない。しかし、2, 3メートル離れた聞き手領域のペンを、たとえ指さしたとしても「\*これ、取って」とは言いにくい。聞き手領域でkuriが使える点が共通語と異なる。

(5) 私：「これ？」kuri? クリ?

(5)はuriも言える。近称でku系もu系も使えるのは(1)から(3)で見た通りである。

(6) Aさん：「それじゃない。あれ。」kuri aranu. kuri. クリアラヌ クリ（指をさす）

(4)と同じ疑問が出てくる。聞き手領域にあるものをkuriで指せるという。共通語では聞き手領域のものを話し手が指し「\*これじゃない、これ」と答えることはできない。宮良話者は、さらに指さし行為を伴えば、「uri aranu. uri.」, 「kuri aranu. uri.」とも言えるという。近称のkuriとuriとをどちらも使用している。他にも「uri aranu. kuri. / uri aranu. kari. / kuri aranu. kari.」（いずれも指さし行為あり）とも言ってよいという。この場合は「uri aranu. kari」は「それじゃない、あれ」となり共通語に対応するが、他は「それじゃない、\*これ.」, 「\*これじゃない、あれ。」と、いずれも聞き手領域にコ系指示詞が出てくるため非文法的な文になる。さらに興味深いのは「kuri aranu. kuri.」は指さしがないといえないのに対して、「kuri aranu. kari.」は指さし行為がなくても言えるという点である。つまり、最初の指示詞と次の指示詞が別であると「別の物を指す」機能を持つ。このような並立の用法は等距離の物に対しても使われるため、共通語の指示詞とは機能が異なる。このことについてはまた別の機会に述べることにしたい。

(7) 私：（正解のペンを手にとって）「これ？」kuri? クリ?

(5)と同じように「uri?」とも聞くことができる。しかし、kariは使えない。近称のkuri, uriに対して、遠称はkariであるためであると考えられる。

(8) Aさん：「そう、それ。」andji. kuriju. アンジクリユー

これも(6)と同じ状況で、聞き手領域の物をkuriで指すことができる。ここで、もし(5)において私が「uri?」と聞いていたら、「uriju.」「それだよ」という答えが返ってくる。聞き手が質問で何の指示詞を使うかによっても変わるという。

以上(4)から(8)を見ると、八重山地方の指

<sup>7</sup> 金水敏・木村秀樹・田窪行則（1989）『日本語文法セルフマスターズシリーズ4 指示詞』寺村秀夫 企画・編集くろしお出版

示詞の少なくとも ku 系と u 系は、共通語の指示詞とずれがあると言える。話し手領域と聞き手領域とで指示詞の使用が分かれてはいない。とはいえ (4) の用例をみると、聞き手領域で u 系が表れており、一見共通語のソ系指示詞と同じ機能を持つかのようにも見える。そこで、聞き手領域の u 系指示詞について、詳細に調査を行った。

## 5 人称代名詞の優位性

さて、眼前指示で聞き手に近いものを指す言い方を尋ねているときに、次のような表現が出てきた。場面の設定は、話し手の私はかき氷、聞き手はアイスクリームを食べていて、私が「それ、おいしい?」と聞く。

(9) wa:munu mmasa:N ? ワームヌ インマサーン?  
(あなたのもの、おいしい?) (石垣)

聞き手が自分のものを「これは、おいしいよ」というときは

(10) ba:munu mmasa:N. バームヌ インマサーン(私のものおいしい) (石垣)

と言うという。「それ」や「これ」という指示詞の部分を wa: (あなた), ba: (私) に置き換えてしまうのである。ただし、宮良話者に尋ねたところ、

(11) uri mmaha:N ? ウリ インマハーン? (それ、おいしい?) (宮良)

とも言えるという。指示詞も人称代名詞も使えるが、人称代名詞の方が自然的確な言い方と感じているようである。

石垣、宮良だけでなく、川平でも似たような表現が出てきた。聞き手が持っているものに対して「それ、何?」と尋ねるときに、最初に人称代名詞の文が出てきた。これがもっとも的確だという。指示詞を使って良いかと尋ねたところ (13) でもよいという答えであった。

(12) wa: mutʃiuru munu no:rja. ワー ムチウルムヌ ノーリヤ (あなたが持っているものは何だ?) (川平)

(13) ure: no:rja. ウレー ノーリヤ(それは何だ?) (川平) ※ ure: は uri 「それ」と ja 「は」が続いたときの形

ものを表す指示詞だけでなく、方向を表す場合も人称代名詞が出てきた。移動の方向を表す指示詞として、共通語ではコッチ、ソッチ、アッチがある\*<sup>8</sup>。金水敏・木村秀樹・田窪行則 (1989) の用例を参考にして、次の会話について尋ねた。子供がボール投げをしている。太郎さんと花子さんが交互にボールを投げている。太郎さんが花子さんに「こっ

ちに投げて」と言う。そして、もらったボールを手を持ち、今度は花子さんに「そっちに投げるよ」と言って投げ返す。そこに次郎さんが遊びにやってきた、という場面設定である。「こっちに投げて」は、uma も kuma もどちらも使える。話し手領域に kuri, uri の両方が出てきたのと同様である。

(14) umakai nangirja:. / kumakai nangirja:. ウマカイ ナンギリヤー/クマカイ ナンギリヤー (こっちに投げて) (石垣)

ところが「そっちになげるよ」は指示詞が使えない。人称代名詞しか出てこないのである。

(15) wa:ʃe:kai nangindo:. ワーシェーカイ ナンギンドー (あなたの所に投げるよ) (石垣)

これは宮良でも同じで (16) のようになる。

(16) wa:ne:ge: nangirundo:. ワーネーゲー ナンギルンドー (宮良)

次郎さんがやって来て、自分が次郎さんに投げようとするとき「あっちに投げるよ」は

(17) amakai nangindo:. アマカイ ナンギンドー (石垣)

となるという。方向を表すときに、自分に向かう方向は ku 系, u 系で表し、「自分や自分とあなた」つまり「自分たち」から離れていく方向には、ka (a) 系を使うということになる。以上から次のような仮説を立てる。

### 〔仮説 1〕

聞き手領域にあるものを指すときは u 系の指示詞より人称代名詞 wa: が優先される。ただし、u 系指示詞が全く使えないわけではない。

仮説 1 の「u 系指示詞が全く使えないわけではない」は、使える場合と使えない場合がある、ということの意味する。では、聞き手領域で、wa: (あなた) が優先されるとき、u 系指示詞が使われるときとどのような違いがあるのかについて検討する。そのために、次のような場面を設定する。太郎さんと花子さんが小川の側でボール遊びをしている。太郎さんは花子さんにボールを手渡して、小川を飛んで渡った。今、太郎さんと花子さんは川を挟んで向かい合っている。花子さんは小川を飛び越えるのを躊躇している。そこで、太郎さんがボールが邪魔だろうと思い「それをこっちになげる」という。そこで花子さんは、「そっちに投げるよ」と答える。

まず、太郎さんの「それをこっちに投げる」の「こっちは、

(18) uri (kuri) ba:ne:ge: nangirja:. ウリ (クリ) バーネーゲー ナンギリヤー (宮良)

となり、「バーネーゲー（私のところ）」の方が使いやすいという。しかし、「私のところ」と同じ意味で、「ウマゲー、クマゲー」という指示詞も使える。

(19) uri(kuri)umage:(kumage:)nangirja:. ウリ(クリ)ウマゲー(クマゲー)ナンギリヤー(宮良)

ここから、「私」を指すときは u 系・ku 系指示詞と共に一人称代名詞 ba: が併用されることがわかる。しかし、花子さんが「そっちに投げるよ」と、聞き手領域である太郎さんを指すときは、「太郎さん=あなた」の人称を用いるとき、u 系指示詞を使用するときとは、指す場所が異なってくる。花子さんのいう「そっちに投げるよ」で一番よいのは、

(20) wa:fe:kai nangindo:. ワーシェーカイ ナンギンドー(あなたのところに投げるよ)(石垣)

である。これは、太郎さんがボールを受けやすいように投げることを意味する。しかし、ボールが太郎さんのところまで届きそうにないので、もっと近くの、例えば手前の草の茂みでもよいからとにかく「そっち側」、川の向こう岸のどこかに投げるという意味であれば、指示詞の u 系が使えるという。

(21) umakai nangindo:. ウマカイ ナンギンドー(そっちに投げるよ)(石垣)

(18) と (19) で「こっちの方」に u 系・ku 系指示詞と人称代名詞 ba: (私) がほぼ同じように使えることと比較すると、(20) と (21) は u 系指示詞と人称代名詞 wa: (あなた) に明らかな差がある。聞き手領域を u 系指示詞で指せるのであれば、(20) も (21) もほぼ同様に言えるはずである。しかし、そうではないことが明らかとなった。

## 6 u 系指示詞と二人称との関連について

そこで、疑問点は、u 系指示詞が聞き手領域を指すことができるのか否かに絞られる。そこで次のような場面を設定した。友人同士が電話で話している。電話であるから相手の姿は見えない。天気のことを話題にする。共通語では聞き手領域をソ系指示詞で指せるので「そっちの天気はどう？」と尋ねることができる。しかし、石垣話者も宮良話者もほぼ同様の答えであった。

(22) wa:da:fe:nu o:tsikja: no:fidu urja: ? ワーダシェーヌ オーツウクウヤ(あなたがいる所の天気は)ノーシドゥ ウリヤー(どうであるか?) (石垣)

(23) wa:ne:ja no:baidu urja. ワーネーヤ(あなたがいるところは)、ノーバイドゥ ウリヤ(どのようなか) (宮良)

この場合、必ず人称代名詞 wa: (あなた) が出てき

て、指示詞は使えない。つまり、u 系指示詞は聞き手領域を指すことはできないということになる。これは、眼前で聞き手を指すときにも同様のことが言える。共通語には、自分が知らない人を指すとき方向の指示詞で「そちら(様)は？」と尋ねる表現がある。「あなた」と人称代名詞で直接相手を指さずに「そちら」と方向で指し示す臍化表現である。これが宮良では次のようになる。

(24) wa: tarudu jaro:ru? ワー タルドゥ ヤロール(あなたは誰でいらっしゃいますか) (宮良)  
jaro:ru は「～でいらっしゃいますか」という敬語である。今、目の前に立っている人に対して敬意を示しながらも、人称代名詞「wa: (あなた)」で直接に相手を指すことができる。

以上から次のような結論が導かれる。

u 系指示詞は、聞き手領域を指せない。話し手と聞き手が同じ場にいるときに、u 系指示詞で聞き手領域が指せるように見えるだけである。ku 系指示詞も u 系指示詞は、基本的に話し手(私)が認識できるもの・場所を指す。

しかし、ここで新たな疑問が出てくる。近称は ku 系と u 系で、その両者ともに話し手(私)が認知できるものや場所を指すということであるが、ku 系指示詞と u 系指示詞とはどのような違いがあるのだろうか。

## 7 u 系指示詞の特徴について

u 系指示詞は聞き手領域を表せないことは明らかになったが、では、u 系指示詞の特徴はどのように記述できるのか。そこで、先ほどの場面(太郎さんと花子さんが小川を挟んで会話している)の続きの場面を想定した。花子さんは、ボールを投げることを躊躇してなかなか投げない。そこで太郎さんが諦めて「(ボールを)その辺に置いておけ」と言って、花子さんに小川を飛んでこっちにくるように言う。「その辺に置いておけ」というのは、

(25) nangeraruna:ka umanga (kumanga) tsikja. ナンゲラルナーカ(投げられないなら)ウマンガ(クマンガ)ツウキヤ(そこに置け)(石垣)と言えるという。また、もっと「分かりやすく言う」なら(26)のようになる。

(26) wa:fe:nga tsikja. ワーシェーンガ ツウキヤ(あなたのところに置け)(石垣)

「その辺」というのは、umanga という。また、上記の場合を宮良では umanga よりも広い範囲は

umata:ge で表せるため「ウマターゲ、スティスウキリヤー（その辺に捨てておきなさい）」(宮良)とも言えるという。太郎さんから見ると、花子さんの周囲は聞き手領域であるが、自分が認識できる範囲であるため u 系指示詞が使える。花子さん自身の場所をスポットで示すときは人称代名詞の wa: が優先され、花子さんの周辺まで広げて指すときは、u 系指示詞が出てくる。ここまでは今までの検証通りである。

しかし、質問を続けていると、興味深いことができた。草が茂っている河原であるが、花子さんの横に小さくて平らになった空き地がたまたまあったとする。太郎さんが花子さんに対してその場所を指さして、「(ボールを)そこに置いておけ」という場合である。宮良話者によると、川の幅が広いときは、(27) *kamanga* sikirja:. カマンガ スウキリヤー(あそこに捨てておけ) (宮良)

と、距離が遠いところを指す *kama* が出てくるのであるが、川幅が狭くお互いの距離が近いと感じられるときは、

(28) *kumanga* sikirja:. クマンガ スウキリヤー (\*ここに捨てておけ) (宮良)

と、なるという。(28)の例を(21)の例と比較すると、ku 系指示詞と u 系指示詞の相違点が出てくる。(21)の例を再掲する。花子さんがどこでもいから聞き手領域側にボールを投げようとするときに u 系指示詞が出てきていた。

(21) *umakai* nangindo:. ウマカイ ナンギンドー (そっちに投げるよ) (石垣)

それに対して、聞き手領域の中でも明確な場所を指す場合、つまり指定性が強いと(28)のように ku 系指示詞がでてくるのである。このことから u 系指示詞は、私を中心とする近称の中で、指定性が弱いときに使われ、ku 系指示詞は、指定性が強いときに使われるのではないかと考えられる。よって、次のような仮説を立てる。

## 〔仮説2〕

ku 系指示詞と u 系指示詞は、近称の指示詞であって指示性の強弱で分けられる。話し手と聞き手がいる空間は、話し手が自分を中心に認識できる空間であり、「私たち」という場を作る。「私たち」空間が近称であり、近称はすべて u 系指示詞で指せるが、特に指示性が強い場合は ku 系指示詞を用いる。

u 系指示詞の指定性が弱いという特徴は次のような例からも確かめられる。二人で昔のことを回顧している場面である。「あの辺に家があったなあ。」と

いう場合は、

(29) *umanuma:rungadu* ja:nu attasonga. ウマヌ マールンガドウ ヤーヌ アッタソング(あの辺りに家があったのだからなあ) (宮良)

のように言える。二人が居る場所からは離れているが同じ方向を見ているときの会話である。「あの辺り」という共通語に対して、u 系指示詞が使用される。この場合、場所の遠近よりも「漠然とした場所」を指すことが優先され、u 系指示詞が使用されたものと思われる。川平でも「向こうには家があったよね。」は次のように u 系指示詞が使える。

(30) *umana:ja* ja:ndu atta. ウマナーヤ ヤード アッタ(向こうには家があった) (川平)

(30)は *kana:ja* 「あそこに」ともいえ、ka 系が使用されるときは、遠近の距離感で「遠さ」が優先される時であると考えられる。

u 系指示詞の特徴は複雑であり、別稿で詳しく述べる予定である。文脈指示詞では、共通語は「明日は雨だそうだよ。」「それ、いつ聞いた?」のように、ソ系指示詞が使用される。八重山地方で文脈指示はほぼ u 系指示詞で出てくる。文脈指示においては、一見共通語ソ系指示詞と八重山地方の u 系指示詞とが対応しているように見える。しかし、共通語では記憶指示はア系指示詞が用いられるのに対し、八重山地方では u 系指示詞が用いられる。宮良話者に、次のような会話をしてもらった。話し手が「あの人はきれいだったね」と突然話しだしたとき、当然聞き手は「だれのこと?」と聞き返すという場面である。

(31) *ure: appare:daso:na:*. ウレー アッパレーダ ソナー(あの人はきれいだったね) (宮良)

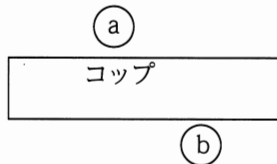
(32) *ta: hanasi* ?ター ハナスイ(誰の話?) (宮良)  
当人の記憶の中にあるものは共通語はア系でしか指せない。しかし、この場合も u 系指示詞が使えるのである(八重山地方では指示詞 *kuri, uri, kari* で人を指すこともできる。ただし自分と同等か目下の人の場合のみ)。(29)や(30)の例と合わせて、u 系指示詞はア系指示詞と重なるようにも見える。先行研究で内間氏が、八重山川平地区の u 系は共通語のア系と同等であると述べたのは、このような一部分の特徴を捉えた結果ではないだろうか。しかし、この点に関しては、更なる調査が必要であるので、今回はこれ以上立ち入らない。

## 8 ku 系指示詞の特徴について

では、ku 系指示詞は近称で指定性が強い場合に用いられるという仮説の証明をする。次のような場



面を設定した。宴会の席で「私」は始め a の位置に座っていたが、移動して b の位置に動いた。そのとき、自分のコップを持ってくるのを忘れた。すると友達が a の場所に座った。そこで友達に自分のコップを取ってもらおうと思い、「私」は「それ、とって。」と友達に言う。「私」のコップは、友達の眼前で聞き手領域にあるため、共通語では「それ」を用いる。(33) uri turiçi:ri. ウリ トリヒーリ (それ、取ってね) (宮良)



uri で指すことができるのであるが、実は kuri も使えるという。このとき友達が目があって、友達が飲みかけのコップに気づいていれば、「指を指さない」で ku 系指示詞で友達に対して依頼ができる。

(34) kuri turiçi:ri. クリ トリヒーリ (\*これ、取ってね) (宮良)

つまり、ku 系指示詞は、話し手、聞き手ともに指しているものが同一であると認識しているときに使用できることがわかる。用例の(28)とともに、聞き手領域であっても、ku 系指示詞が使用できるのは、指定する対象や場所が明らかであり、指定性が強い場合であると言える。よって仮説2は成り立ち、次のように結論づけられる。

ku 系指示詞と u 系指示詞は、眼前指示においては話し手からみた近称で用いられ、両者は指示性の強弱で分けられる。一人称で ku 系指示詞が出やすいのは、話し手の近くのは物は特定しやすいからである。よって、八重山地方での指示詞と人称との関連は見かけ上のものであり、ku 系指示詞、u 系指示詞の本質ではない。

## 9 まとめ

八重山地方の ku 系、u 系、ka 系の指示詞の特徴をまとめる。共通語と同じく指示詞は三語あるが文法は異なる。眼前指示において、近称は ku 系と u 系であり、遠称は ka (a) 系で表される。ku 系と u 系の相違は、ku 系は指定性が強いという marked の特徴を持つことが挙げられる。つまり、uri の部分集合を kuri が指すことになる。これが、話者が持つ「kuri と uri はほとんど同じ」という意識につながっているのではないだろうか。

共通語との相違は他にもある。指示詞と人称との結びつきが異なる。共通語はコ系が一人称、ソ系が二人称という一対一の関連がある。しかし、八重山では一対一の明確な対応はない。近称では話し手と聞き手が同じ場にいれば、ku 系 u 系ともに人称に関係なく使うことができる。この場合、u 系指示詞は二人称領域で用いられるように見えるのであるが、それは見かけ上のものである。なぜなら電話で「そっちの天気はどうか」と共通語では言えても、u 系指示詞では尋ねることはできない。聞き手がその場にいなければ u 系指示詞を用いることができないのである。u 系指示詞は二人称領域を指す指示詞ではない。指示詞を使わず、「あなたのところの天気はどうか」と人称代名詞「あなた」を用いて聞き手領域を表すことになる。

これは、話し手自身や聞き手自身を指すときには、指示詞よりも人称代名詞を優先する傾向が強いことと関連がありそうである。共通語では、話し手自身のことを「こっち」、聞き手のことを「そっち」で指すことができ、例えば「こっちのことより、そっちの方が心配だ」のように使用できる。しかし、八重山では、「私」「あなた」の人称代名詞を優先させることになる。

以上から、共通語のコソアの指示詞が持つ文法と琉球八重山地方の指示詞の文法は異なるものであると結論づけられる。今後の課題としては、指示詞 ku 系 u 系 ka 系と人称 (一人称、二人称、三人称) との関係、指示詞 ku 系 u 系 ka 系と人称代名詞 ba: (私) wa: (あなた) との関係、指示詞の並列用法、u 系指示詞の記憶指示や文脈指示用法の記述等多々ある。また、現在八重山にて共通語のコ系ア系は多用するが、ソ系をあまり使用せず、ソ系指示詞を用いるべきところになぜア系指示詞を用いるかという問いに対する共時的な研究と考察も必要であろう。一つ一つを丹念に調査し、記述していく予定である。

平成十八年度から平成二十年度にわたって沖縄県八重山地方にて調査に協力して下さった方々に厚く感謝を申し上げます。

- ・石垣市石垣 新城弘さま、新城栄さま
- ・石垣市宮良 新垣重雄さま、仲間清隆さま、松原秀吉さま、石垣實勇さま
- ・石垣市川平 70 代男性、野底苗さま

本稿は、平成二十年度科学研究費補助金(若手研究 B)(課題番号 18720125)の研究成果の一部である。